

ゴール型ゲームにおける苦手な子どもへのみとりと支援

～学習過程の工夫と「みる」指導のあり方によって～

則藤 一起

ゴール型ゲームでは、運動の苦手な子どもはどのように動けばよいのかが分かりにくい。特に高学年になると、今までの運動の経験の差がより顕著に現れる。苦手な子どもがボールに触ることなく単元が終わってしまった…ということも見受けられる。この1年間の中で、単元配列を工夫し、学習過程の工夫と客観的に「みる」ことに焦点を当てたことにより、“そう動けばいいんだな”“シュートのうち方がわかったぞ”“パスはここにするといいよね”と、ゴール型ゲームの運動の楽しさに触れ、その行い方を身に付けさせる工夫を探った。5年生のハンドボールとバスケットボールの2実践をととして、運動の苦手な子ども5人が、ボールを使った運動に対して好意的になった。

キーワード：ゴール型ゲーム、ハンドボール、バスケットボール、学習過程、みる

1. 研究目的

豊かなスポーツライフを実現する資質・能力を育成するためには、自己やチームの課題を解決すべく探究する「探究力」と、対象、他者、自己との対話を行いながら学習や行動を調整する「省察性」を身に付けさせる必要がある。

ゴール型ゲームでは、運動の苦手な子どもは、どのように動けばよいのかが分かりにくい。特に高学年になると、今までの運動の経験の差がより顕著に表れ、苦手な子どもは苦手なまま単元を終えてしまうこともある。そこで、

1学期と2学期の単元を関連させて組み、学習過程の工夫と、「みる」視点を与えることで、苦手な子どもにとってそれらの運動が行いやすくなり、好きになるだろう。

と仮説を立て、取り組むこととした。そして苦手意識が軽減された子どもたちは、それらの運動を好きになり、次もやってみようという意欲につながるのではないかと考えた。

2. 研究方法

研究の中心に「生き生きと動いて学ぶ」ことを据えて授業づくりに取り組んだ。特に「運動が苦手な子ども」へのみとりと支援の工夫により、クラス全体の子どもたちの意欲が高まると考えた。柱として、以下の3点を重点的に取り組んだ。

2. 1. 単元を関連させて組む

1学期の「ハンドボール」と2学期の「バスケットボール」を関連させることで、動き方の理解をしやすくさせる。

2. 2. 学びの筋に沿った学習過程の工夫

単元のゴールを見据え、子どもがどんなことに問いを持つのかを考え単元を構成する。単元途中では、思いをみとりながらその過程を修正していくことも考えられる。ゲームの様子やふり返りカードから困っていることをみとり、声をかけていくことを大切にする。

2. 3. 客観的に「みる」

コート外にいるときに応援の声かけを考えさせたり、「今どうしたらよい？」と動き方を個別に問うことであったり、また、ゲーム後のふり返りでボードを使って全体で共有させたりする。これらのことにより、動き方を客観的に捉え、ボールを持っているときと、持っていないときの動き方を考えさせる。

以上の3点を中心に取り組むことで、苦手な子どもも楽しみながら運動に取り組もうとする姿になると考えた。

他には、使用する道具、ルールにおいても工夫と支援を行うこととした。ボールについては、両単元ともスポンジ製の柔らかいものを使用することで、恐怖心を取り除き、安心して、ダイナミックに運動できるようにした。また接触を避けるために、持っているときや、ドリブルのときにはそのボールに触れないことにして、安心して周りを見ることにつなげた。ゴールについても、より入りやすくなるように大きさを工夫した。

3. 授業の実際

3. 1. 5Cハンドボール

1学期の5Cハンドボールは、パスだけでボールを進め、攻めの動き方がわかりやすくなるようにした。

ボールを持たないときにどのように動いてパスをもらうのかを考えさせたかったからである。課題の流れは、学習過程と子どものふり返りとを擦り合わせて、ボールを持たないときの動きを中心に設定した。

- 勝ちたいな。シュートをしたいな。
→パスをつないで攻めよう（第2時）
- パスがなかなか出せないぞ。
→動きながらパスをつないで攻めよう（第3時）
→パスをもらう場所を考えよう（第4時）
- パスを出した後が大事な。みんなが動かないといけないな。
→パスを出した後、どうする？（第5時）
→パスを出した後、前に行こう「パス＆GO！」
（第6、7時）

と進めていった。みる視点は、

- ・どこにパスをするのか（周りの仲間の位置）
- ・どこに動くのか（攻め、守りのときの自分の位置）
- ・どこをねらってシュートをうつか

などである。苦手な子どもの思いは、

けんた「シュートをうちたい」

かりん「パスが思ったより難しい」

けいこ「相手が素早く動いてついていけない」

というものだった。パスについては、授業の初めに練習の時間をとって取り組んだ（図1）。その際、得意にしている子どもの様子を見て、投げる・受けるコツを見つけるようにした。またゲーム中は、ボールと相手のどちらも追いかけてしようと中途半端になってしまうので、「守りのときには、守る相手だけをよく見て動くのがよい」という意見を取り入れ、ピッタリと守っている姿につながった（図2）。また、ゴールを広くしたので、シュートをうとうという思いをもちやすかった。



図1 チームでパスをするぞ



図2 相手をピッタリとマークするぞ

3. 2. NBA～5Cバスケ～

2学期のバスケットボールは、ドリブルも入れ、自分もよりたくさん攻めているのだという思いにつながるようにした。また、5Cハンドボールでの課題を受け、「全員シュート」というサブテーマを提示して、取り組んだ（図3）。また、5Cハンドボールで学んだことを想起させようと掲示物を準備し、動きを思い出させた（図4）。



図3 単元名の掲示「5Cバスケ～NBAでAll shoot～」

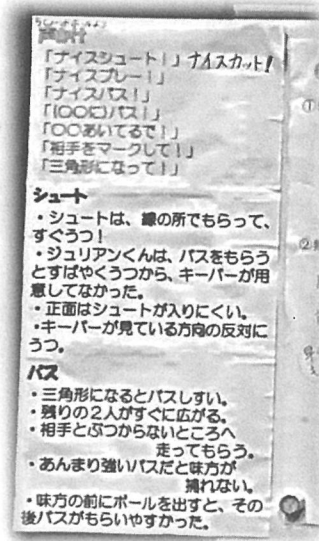


図4 5Cハンドボールでの気付きのまとめ

課題の流れは、「シュート」の仕方を中心に設定した。

- ドリブルが防げないよ。
→無敵ドリブルを防いで攻撃につなげよう（第2時）
- シュートを決めたい。
どうすればシュートができるの？
→自分から動いて（相手をかわして）、パスをもらおう（第3時）
→作戦を考えてシュートをしよう（第4時）
- でも、まだシュートがうてないよ。
→バディチームの声かけを生かそう（第5時）
- 相手の守りが上手くなってきて、シュートがうてないよ。
→素早く攻めよう（第6時）
- 素早くってというのは、パスとドリブルのどっち？
→パスを使って素早く攻めよう（第7時）
→今まで考えた攻め方で攻めよう（第8時）

と進めていった。みる視点は、5Cハンドボールのときに加えて、

- ・シュートはどこからうつとよいのか（うつ位置や、ねらう場所）
- ・相手をかわす方法（攻めのときのフェイントの方法）
- ・ドリブルは無敵だけど、攻めるのが遅くならないか（ドリブルとパスの使い分け）

などである。苦手な子どもは、比較的プラスに思いを持っており、単元前半から、

ゆい「シュートはできなかったけど、パスを上手にできた」

けいこ「和歌山選手（和歌山トライアンズ所属）に言われたパスでがんばっていききたい」

あやか「（バックボードの）赤い線（図5）を意識できたから次もねらっていきたい」

などであった。



図5 赤い枠を狙ってシュート

4. 授業の考察

4. 1. 5Cハンドボール

この単元では、全員で攻めるという思いを持つことを願い、パスの回数に注目させた。また、運動の苦手な子どもたちは、

けんた「ギザギザ作戦成功」

ゆい「ボールをカットしようとした」

かりん「パスを大きくしたら上手くいった」

けいこ「マークのガードをがんばった」

あやか「キャッチが上手くなった」

など、自分のできることに精一杯取り組んだ。みる視点から、

- ・三角形になるとパスしやすい
- ・残りの2人がすぐに広がる

など、ボールを持たないときの動きも共有できた。このように前に動こうという意識が付いてきているものの、シュートをうてる位置でパスをもらうということ

が難しかった。7時間の中で、シュートまでつなぐことはできなかったが、ゲームに一生懸命取り組むことはできた。

表1 ボール運動への思い①

| ボール運動は好きですか？ | 4月 | 単元後(7月) |
|--------------|-------|---------|
| けんた | ややいいえ | ややはい |
| ゆい | ややいいえ | はい |
| かりん | ややいいえ | ややはい |
| けいこ | ややはい | ややはい |
| あやか | いいえ | いいえ |

※けいこは、「ややはい」と答えているが、運動について好きかという問いに「いいえ」と答えていたので、取り上げている

あやかについては、毎時間のふり返りの「精一杯運動しているか」「上手になれたか」「コツの発見はあったか」「友達との協力」は、良い方に○をつけていることが多かったが、ボール運動を嫌いだと思ったままである。シュートを決めることができなかったことや技能の伸びを感じられなかったことが、単元後のアンケートに反映していると考えられる。

4. 2. NBA～5Cバスケット

まず、けいこのふり回りカード（図6）から、パスの方法を共有したことにより、けいこがより積極的に活動するようになった。

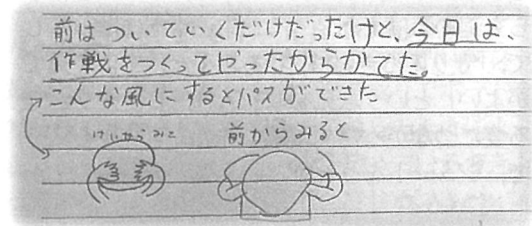


図6 けいこのふり回りカード

単元のめあてである「全員がシュートをしよう」ということを考え続けたので、グループのリーダーも「みんなで攻めてシュートをうとう」と作戦を考える子どもが多かった。

けんた「シュートを決めるコツは、ジャンプしてタイミングよく投げると入りやすい」

ゆい「（3時間目で）初めてゴールを入れれてうれしかった。ドリブルしてからシュートをうちたい」

けいこ「バウンドパスをいっぱいできた。シュートは決められなかったから次は決めたい」

あやか「ドリブルが上手くできた。シュートをがんばりたい。」※1

と、シュートに対して積極的に取り組んでいることがわかる。

また、プレーヤーは、

- ・応援の時、コートの横を動きながらアドバイスをしているのがよかった

・横を動きながら「バウンドパス」とかくわしく言ってくれて分かりやすかった

と感じていた。みる視点があったからこそ、兄弟チームはより近くでアドバイスしようと考えた。あやかも旗を持ち、積極的にアドバイスをしていた。

ただ、5Cバスケットボールではドリブルを入れたことで、1人で攻めていく姿も目立った。けいこのチームは、リーダーがドリブルで切り込むので、けいこはそれについていくのに必死で、なかなかパスをもらうことができなかった。あやかのチームのリーダーは、クラスで一番チームのことを考えている子どもであったが、あやかもまた、8時間の中では、ついていくことに必死だった。前での作戦（カウンター）もあったが、2人はそれをしなかった。マークやドリブルなどに価値を見出し、一生懸命動いた。毎時間「精一杯運動できたか」は2人とも「はい」であった。シュートがうてないでいるあやかには個別に声をかけ続けたが、シュートはうてなかった（表2）。しかし最後の作文で「ドリブルが何度もできるようになった」※2とプレーの成長をととても感じていた。また単元終了後、アリーナ体育館（和歌山トライアンズ本拠地）へ出かけたときは、シュートをうつことができ、うれしそうであった※3。単元をとおして、成長を感じ、5Cバスケットを好きになったことが何よりうれしい。

表2 両単元でのシュートとゴール数

| | 5Cハンドボール | | 5Cバスケットボール | |
|-----|----------|------|------------|------|
| | シュート数 | ゴール数 | シュート数 | ゴール数 |
| けんた | 1 | 0 | 8 | 3 |
| ゆい | 0 | 0 | 17 | 2 |
| かりん | 0 | 0 | 16 | 5 |
| けいこ | 2 | 1 | 3 | 0 |
| あやか | 1 | 0 | 0 | 0 |

表3 ボール運動への思い②

| ボール運動は好きですか？ | 7月 | 単元後(11月) |
|--------------|------|----------|
| けんた | ややはい | はい |
| ゆい | はい | ややはい |
| かりん | ややはい | ややはい |
| けいこ | ややはい | ややはい |
| あやか | いいえ | ややはい |

5. 成果と課題

苦手な子どもを中心にみとり、支援を行ったことにより、「けんたくんが初めてシュートを決めた」「あやかちゃんのマークがすごかった」と、グループでたたえ合う姿が増えた。グループ内だけではなく、クラスによるこびと感じている子どももいた。また、5人とも「ややはい」以上の結果となったことはうれしい限

りである（表3）。高学年において、今までの運動経験の差は大きかったが、それを埋めようと兄弟チームで互いに見合い、自分たちの動きに生かすことができた。みる視点を与え、良いアドバイスや方法を可視化したことで、それを言えばいいんだと安心してアドバイスをしている姿があった。

学習の過程を順に掲示していったこと（図7）で、学習したことが共有しやすくなり、「あのときやってみたこれを使ってね～」と以前のことを入れて話す姿があった。



図7 学習過程の掲示

「活動あって学びなし」の学習にはしなくなかった。ボールを持たないときの動きを中心に作戦を考えさせた。しかしそこに時間をとりすぎ活動時間が少なくなった。それぞれ作戦を考えてはいたが、ゲームが始まるとそれ通りに動くのは難しかった。作戦を初めに考えるのではなく、必要になったときに考えさせることが、子どもたちの本当の学びになると改めて考えさせられた。

最後に、「ゴール型の学び」とは何かを、あやかの思いや仕草の※1、※2、※3から考えると、チームに自分から関わり、その行い方が分かり、ゲームに積極的に参加するということであると考え。単元中にシュートはできなかったが、あやかの中で「ゴール型運動の楽しみ方」は学んだはずである。「全員シュート」に向かつて単元を進めたことは間違いではなく、子どもたちの思いがそこに向かえたからこそ、それぞれが一人一人を大切にできたと考える。

体育科学習と学級経営は大きく関わる。今後も運動の苦手な子どもに焦点を当て、どの子どもも「生き生きと動いて学ぶ」ことを目指していきたい。

参考文献

小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 体育編 文部科学省
梅野圭史編者 身体教育研究会著(2016)「小学校ボールゲームの授業づくりー実践理論の生成と展開ー」創文企画